「世襲を断ち切れ」
――茨木のり子と高群逸枝の系譜学――

丹　野　さきら

はじめに

今日の重要な社会課題と見なされる少子化問題や人口倫理をめぐる考察においては、人が「生まれること」と、「人類の存続」や「世代の連続性」との結びつきが争点の一つになっている。個の出生を即座に「人類」や「人口」へと結びつける思考には、常に、個の自由を掘り崩す全体主義的陥穽がつきまとう。その論理的回路に抗い、個の自由が拠って立つ理論的基盤を構築する可能性を、茨木のり子(1926-2006)と高群逸枝(1894-1964)の思想的共振のなかで探ることが、本稿のテーマである。

議論の道筋としては、戦後詩を代表する詩人である茨木の詩と、1920年代に詩人として活躍した後に日本女性史の開祖となった高群の歴史研究や恋愛論における「世襲」への批判を起点に両者の共鳴関係を論じたうえで、人新世の思想家としての茨木と高群が提起しうる視座と論点を明らかにしたい。

1　1976年――茨木のり子、隣国語の深い森

(1)　茨木のり子の現在地

2010年代以降、韓国では茨木のり子への関心が急速に高まっており、エッセイや詩集が相次いで翻訳出版されている(金 2020)[1]。金智英によれば、韓国で茨木の名が本格的に知られるようになったのは、茨木が尹東柱(ユンドンジュ)――留学先の日本で逮捕され、1945年２月に27歳で獄死した詩人――について書いたエッセイが1995年に日本の高校教科書に掲載されて以降のことであり、韓国における茨木の関連記事の冒頭ではほぼ全て、茨木と尹東柱との関係に言及されている。その後、2009年と2011年に出版された小説で、著者に大きな影響を与えた詩「わたしが一番きれいだったとき」の作者として紹介されるようになった(金 2020：252-253)。

今日では韓国の人々から親しまれている詩人である茨木は、1976年に韓国語を学び始めた。この前の年、茨木は夫である三浦安信と死別している。韓国語を習い始めた頃を振り返ったエッセイで、茨木は次のように述べている。「語学をしゃにむにやることで、哀しみのどん底から立ち直ろうとし、おかげで何とか立ち直れました。単語一つ覚えるにも、前へ前へと進まなくては出来ないことでしたし。ドイツ語にしようか、ハングルにしようか迷いましたが、今では隣の国の言葉を選んでよかったと思っています」(茨木 2023：19)。精進を重ねて「隣国語の森」[2]を歩き続けた茨木は、1990年には翻訳詩選集『韓国現代詩選』を刊行するまでになる。

茨木が実際に韓国語を学び始めたのは50歳の時だったが、韓国への関心は幼い頃から彼女の心を占めていた。そうした韓国への思慕は茨木のエッセイや詩から多面的に浮かび上がらせることができるけれども[3]、ここでは、高群逸枝との接点という観点から、母の姉妹を意味する

言葉である「이모（イモ）」に着目することにしよう。

（2）「이모」から「妹」へ

「이모（イモ）」という語を知った時、『万葉集』に頻出する「妹」のことが思い浮かんだ茨木は、男性から見た妻、恋人を指す「妹」の原義について、隣国語と同様に母の姉妹――特に叔母を指していたのではないかと、二つの単語の言語学的関係に思いを馳せている。「こどもたちは母系制社会で、母かたの大家族のなかで育ち、成長して、最初に意識させられる異性は大きな家に共に住む、年若い美しい叔母たちであったのでは……。母ほどこわくはなく、かわいがってもくれ、甘美さを伴った慕わしいもの、なつかしいものとしての対象」。「母かたの伯母・叔母から転じて、恋人、妻、いとしきものへ――と意味が移っていったような気がしてならない」（茨木 2023：108）。

日本語と韓国語の系統関係は言語学的には立証することはできないが[4]、言葉へのこうした着眼が、古代史への関心と連動していることは注目される。「古代史を読むのが好きですから、朝鮮語ができたら、どんなにいいかと思って」（茨木 2023：19）――これは、茨木が韓国語を学ぶ動機を尋ねられた際の、答え方の一つである。茨木の夢は、韓国語が上達したら『古事記』を読み直すことだった。「もう少しうまくなったら、金思燁（キムサヨブ）氏の『古代朝鮮語と日本語』というおもしろい本を手引きに、もう一度『古事記』を読み直してみたい。なにしろ漢字の読みが日本式と朝鮮式ではまるで違うので、そういう視点から光を当てると、新たな発見が沢山ありそうなのだ」（茨木 2023：19-20）。

このように、いくつもの水脈が合流して地上に大きな流れが現れ出るかのように韓国語と茨木が運命的な出会いを果たした1976年は、高群逸枝像の形成過程が転機を迎えることになった年でもある。

2　1953年――高群逸枝、母系制という光

（1）高群逸枝の現在地

1976年、日本女性史の礎を築いた高群逸枝の夫である橋本憲三が世を去った。高群は、前半生は詩人、評論家、アナーキストとして活躍した後、1931年に世田谷の「森の家」で歴史研究を開始し、37歳以降の後半生を女性史研究に捧げた人物である。橋本は資料収集、家事など高群の研究生活を支えて伴走し続け、1964年に高群が没した後は、『高群逸枝雑誌』を発行する等、高群の「顕彰」に力を注いだ[5]。

高群が歴史の面白さに目覚めたのは、熊本県守冨村北部高等小学校四年の頃、有賀長雄の『大日本歴史』を読んだ時だったと、自伝『火の国の女の日記』で書いている。「記念すべき書物だった。私は学校で習う歴史以外には歴史を知らず、だから歴史とは事柄の羅列で、ひどく退屈な記憶学課の一つでしかないと思っていたが、この本から受け取る感じは、それとはまるでちがっていた。この本には、古代以下のことが実証的に―学問的に―そして未開からの発展として究明されており、その究明にはいつでも読者の参加がもとめられている、といったような、いわば生きた歴史の把握のしかたが感じられた」（高群 1965：72）。そして、そこで論じられている「通い婚」と、高群の身近にあった婚姻習俗との類似性に気づき、深い興味を感じたという。

高群は13年余をかけて『招婿婚の研究』という大著をまとめあげ1953年に刊行するが、歴史研究者としての高群の原点は、こうした「生きた歴史」への開眼、そして「原始日本にみられる民衆の成分、産業と用器、婚姻制等を知ったとき、私は自分のこれまでの狭い知識の山ひだの間から、とつぜん広闊な地平線がひらけるの

を感じて、息をのむ思いだった」(高群 1965：72)という、まさに驚異(タウマゼイン)[6]があったといえるだろう。

(2)「天啓」――母系学説の樹立

婚姻形態の研究を通して高群が明らかにしたことは、一言でまとめると、「招婿婚という母系婚が、太古から南北朝にいたる長い期間、支配的婚姻形態としてわが国に存続した(南北朝以後からようやく遺存形態となる)というこの一事」(高群 1966：1202)である。

招婿婚には「妻問婚」と「婿取婚」の二類型がある。前者は夫が妻方に通い、原則として別居する形態で、大和時代に見られる。後者は飛鳥時代以降で、妻方での同居を原則とし、前婿取婚・純婿取婚・経営所婿取婚・擬制婿取婚の四段階に分けられる。「婿取婚」は平安・鎌倉時代に顕在化したが、室町以降は嫁取婚の時代を迎え、女性が夫家の家長のもとに迎えられる婚姻形態となった(高群 1967c)。

膨大な史料を渉猟して招婿婚の変遷を跡づけた高群にとって、この婚姻形態は、女性の高地位と恋愛の自由を支えるものであり、その実態を明らかにしたことは、中世以後の主従的な夫婦観、恋愛の不自由、女性の低地位に対抗するオルタナティブなパートナーシップ観と家族像を提示しうるという意味において、極めて大きな歴史的意味があった(高群 1967b)[7]。

招婿婚研究の体系化を可能にしたのは、研究の出発点近くで高群に訪れた「多祖の発見」というひらめきである。「一瞬のひらめき―原始の母系共同体の女たちのもとに、招婿婚で他から男たちが妻問いして、そこに、多くの子が生まれて育つとなると、その母系共同体には、同時に、またはつぎつぎに多くの他氏の子孫が生まれてそだち、一方において父系認識がたかまってくると、氏称には固有母系を名乗りながら、父系である招婿出自によって多祖現象をおこすのであり、それは母系共同体解体の過程をあらわしているものではないかとする考えであった」(高群 1965：251)。

このように、高群は婚姻形態と系譜意識の変遷から母系制社会の核心(と高群は考えた)を見いだし、茨木は語源の糸(と茨木は考えた)をたぐり寄せて母系制社会を描きだしたのである。『招婿婚の歴史』が出版された1953年、茨木は、川崎洋とともに同人詩誌『櫂』を創刊した。

3　1926年――途切れる系図、消えゆく人類

(1) 消滅へと至る恋愛

『櫂』には谷川俊太郎や大岡信など多くの詩人が参加したが、堀場清子は、茨木と周囲の男性たちとの関係について、次のように述べている。「父、弟、夫、さらに詩人としてスタートして以来の『櫂』の仲間たち、彼女の周囲にはいつも優れた男性がいて、その人々に愛され大切にされてきた。それは彼女自身の卓抜した才能、人間的な賢さ、女性としての魅力等々によるところでもあるが、やはり日本の女としては例外的環境だろう。信条からいって必然的にウーマンリブでありながら、そこに執さず、より普遍的な立場に重心を置く傾向は、それら身近な男性たちから、抑圧以上に尊重を受け取った経験によるかと思われる」(堀場 1985：143)。

高群と橋本との関係については、論者によって捉え方に違いはあるが、高群の恋愛観を象徴的に表わすのが1926年刊の『恋愛創生』(高群 1967a)であることは大方の意見の一致を見ることができるだろう。

この書物で高群は、「恋愛が人類を消滅へと導く」とする恋愛論を展開した。巻頭言で、「恋愛の経路」として「精神主義」「肉欲主義」「霊肉一致主義」「一体主義」の四つを挙げ、これらのうちの「一体主義」を、高群は自らの理論

的足場として掲げる。「一体主義は、恋愛の究極を、一体と見る。一体と感じた恋愛において、生殖し、人類における男女両性の一体化、男女両性の消滅期へまで、子孫を一体的過程の上において維持する本能」。一体主義は、「恋愛をも、肉欲をも、ともに自然のからくりである」とし、「科学上の地球の冷却説に順応して、人類の自然消滅を予想する」（高群 1967a：10）。

このように消滅を志向する高群の一体主義的恋愛論は、個の恋愛や生殖を、種の存続や国家の繁栄の手段として位置づける目的論的恋愛・生殖観を拒否し、個の絶対的自由を主張するものだった（丹野 2009）。

（２）血統の鎖

高群が『恋愛創生』を出版した1926年に生まれた茨木のり子には、世襲への異議申し立てをテーマとした「最上川岸」という詩がある。「子孫のために美田を買わず／こんないい一行を持っていながら／男たちは美田を買うことに夢中だ／血統書つきの息子に／そっくり残してやるために／他人の息子なんか犬に喰われろ！／黒い血糊のこびりつく重たい鎖／父権制も　思えば長い」「人間の仕事は一代かぎりのもの／伝統を受けつぎ　拡げる者は／その息子とは限らない／その娘とは限らない」「世襲を怒れ／あまたの村々／世襲を断ち切れ」（茨木 2010a：144-147）。

この詩にみられる父権制批判と先にふれた母系制への思慕という観点から、茨木と高群の思想的共鳴を論じることもできるだろう。しかしここでは、そうした視点と関連しつつも少し異なる角度から、人新世をめぐる議論を参照して両者の類縁関係を論じてみたい。

高群が『恋愛創生』で人類の自然消滅説を唱えてからおよそ一世紀が経ち、現代社会は人類が地球にもたらす破壊的な影響に向き合わねばならない局面を迎えている。高群のいう自然消滅は、「人類とその他の生物種の大量絶滅を含意する黙示録的概念」（河野 2020：33）である「人新世」を予示するものと捉えることもできる。人間の諸活動が自然環境に与える影響という問題に対処するために考えられる方策の一つとして、「人間の人口の削減」が挙げられる（河野 2020：40）。人口抑制策の負の側面について論じる紙幅はないが、ここでは、茨木と高群にならって、世襲批判という立脚点から、「人口」概念のもつ意味を再考する道筋が示されることを指摘しておこう[(8)]。増加させるためであれ減少させるためであれ、「人口」と個人の意思決定を直接結びつけるのであれば、個の自由意志を疎外するものとして絶えず「人口」が立ちはだかる。精確にいうなら、個の意思決定を従属させる大義として「人口」が措定されることになる。

おわりに

そのような「人口」を支える装置の一つとして機能するのが、「世襲」「血統」に他ならない。茨木や高群の思想からわれわれが学びうるのは、ダナ・ハラウェイらがいうように、「『類縁関係（kin）』を、祖先や血筋で結ばれた実体とは異なる何か、あるいはそうした存在にとどまらない何かにすること」（ハラウェイ 2017：103）、「類縁関係を新たに創り出すこと、親類縁者を作るための新しい概念と実践を生みだす必要があるということ」（Clarke 2018：２）である。茨木なら、それを「渦巻」という言葉で表現するだろう――「ひとりの人間の真摯な仕事は／おもいもかけない遠いところで／小さな小さな渦巻をつくる」（茨木 2010a：51）。

茨木の詩が「激変する韓国社会でアクチュアルなものとして響き」（金 2020：263）、人々の心を打つように、また、高群の人類消滅説が未

来構想としてある意味での希望を湛えているように(丹野 2022：113)、人新世の思想家としての茨木と高群の相貌を明らかにすることで、両者の思想に絶えず新たな息吹を与えることができるのだ。

【注】

(1)「韓国における茨木のり子」に関する記事の例としては、『AERA』2023年4月3日号の記事(成川 2023)が挙げられる。同記事では「茨木の詩『自分の感受性くらい』を、昨年、〔BTS(防弾少年団)の:引用者注〕RMがSNSでシェアし、日本と韓国双方で話題になった」(成川 2023：19)とあり、例えば『スターニュース』で次のような情報を確認できる。「防弾少年団 RM『初心消えかかるのを　暮らしのせいにはするな』.. 明け方に載せたフレーズ」『스타뉴스』(2022.10.13)。

(2) 茨木の韓国語に対する姿勢をよく表わす詩、「隣国語の森」の冒頭を掲げておく。「森の深さ／行けばいくほど／枝さし交し奥深く／外国語の森は鬱蒼としている／昼なお暗い小道ひとりとぼとぼ」(茨木 2010b：150)。

(3) 金素雲(キムソウン)の『朝鮮民謡選』を少女時代に愛読していたこと(茨木 2023：16-19)や、三十歳を過ぎた頃から、「『いいな』と惚れこむ仏像は、すべて朝鮮系であること」に気づき、柳宗悦の『朝鮮とその芸術』に出逢ったこと等(茨木 2023：22)。

(4) 韓国の親族名称と親族呼称については(沖森・曺 2014：102-107)を参照。韓国語と日本語の系統については、アイヌ語も含めて、「いずれも古い記録の限界によって、それらの系統関係を云々できない」(野間 2014：82)。

(5) 堀場清子は、高群の詳細な年譜である『高群逸枝の生涯』において、高群没後を「憲三による逸枝の顕彰(1964～1976)」の期間と位置づけている(堀場 2009)。

　橋本が高群の研究を支えたことについて、鹿野政直は、「家事担当者兼逸枝のプロデューサーとしての憲三」、「逸枝に代って資料を求めて古書店へ赴き図書館へ通い、彼女の書きぬいたノートを整理」(鹿野・堀場 1977：185)、「逸枝の著述の最初の読者となり批評者となった」(鹿野・堀場 1977：186)こと等にふれ、「夫のがわよりするこの〝一体化〟の積極的な実践なくしては、疑いもなく逸枝のその後の巨大な仕事はなかった」(鹿野・堀場 1977：186))と述べている。

　対照的な橋本評として、山下悦子の見解がある。山下によると、「橋本の協力がなければ女性史の元祖高群逸枝の存在はなかったことも事実」だが(山下 2022：49)、「橋本は口述筆記や手紙の代筆など、それなりに高群の世話をしていたのだろうが、食事の世話や生活面に対する配慮は、一貫して希薄だったように見受けられる」。「編集者として有能だったとする石牟礼道子のように、橋本を高く評価する人もいるが、……橋本と高群の感性のズレは一生埋まらず、はたして高群にとって彼はいい編集者だったのか、疑問を感じるのだ」(山下 2022：48)。

(6)「驚異(タウマゼイン)の情(こころ)こそ知恵を愛し求める者の情」、「求知(哲学)の始まりはこれよりほかにはないのだ」(プラトン 1974：220)。

(7) 高群の招婿婚研究に対して、歴史学的な観点からは、五段階に分けた各段階の時期の史料を提示して論証していない点、「招婿婚」「婿取婚」を学術用語として用いることの問題点などが批判されている(服藤 2022)。

(8) 高群思想を通して人口概念を再考する試みについては、拙稿(丹野 2022)で論じた。

　茨木における「世襲」に関しては、水田宗子の論考に次のような指摘がある。水田は、茨木が「生殖する性の深層を切り捨てた言語で、一貫した信念で詩の世界を構築してきた」(水田 2012：86)ことに着目し、「茨木のペルソナは、女という総称に属さない『わたし』、出自や子孫とは切れている『わたし』、いわば父母のDNAから切り離され、生殖もしない『わたし』という個体なのである」と論じている(水田 2012：85)。

【文献】

茨木のり子，2023，『ハングルへの旅　新装版』朝日新聞出版.
茨木のり子，2010a，『言の葉１』筑摩書房.
茨木のり子，2010b，『言の葉２』筑摩書房.
沖森卓也・曺喜澈，2014，『日本語ライブラリー　韓国語と日本語』朝倉書店.

鹿野政直・堀場清子, 1977,『高群逸枝』朝日新聞社.
金智英，2020,『隣の国の言葉ですもの：茨木のり子と韓国』筑摩書房.
河野哲也，2020,「人口と集中を抑制する新しい文化について」『哲学』71，pp.32-44.
高群逸枝，1965,「火の国の女の日記」『高群逸枝全集』第10巻，理論社.
高群逸枝，1966,「招婿婚の研究」『高群逸枝全集』第３巻，理論社.
高群逸枝，1967a,「恋愛創生」『高群逸枝全集』第７巻，理論社，pp.7-213.
高群逸枝，1967b,「女性史研究の立場から」『高群逸枝全集』第７巻，理論社，pp.216-221.
高群逸枝，1967c,「日本婚姻史」『高群逸枝全集』第６巻，理論社，pp.5-214.
丹野さきら，2009,『高群逸枝の夢』藤原書店.
丹野さきら，2022,「高群逸枝はカタストロフの夢を見る：J＝P・デュピュイと田辺元」芹沢俊介・服藤早苗・山下悦子編『別冊環26　高群逸枝1894-1964』藤原書店，pp.105 -115.
成川彩，2023,「『自分は自分』と教えてくれた：BTSはコロナ禍の救世主」『AERA』16, pp.17-19.
野間秀樹，2014,『日本語とハングル』文藝春秋.
服藤早苗, 2022,「古代・中世の婚姻形態と同居家族・「家」:『招婿婚の研究』の批判的継承」芹沢俊介・服藤早苗・山下悦子編『別冊環26 高群逸枝1894-1964』藤原書店，pp.140-154.
堀場清子，1985,「あらゆる君主すてる旅路：茨木のり子の出現」『花神ブックス１　茨木のり子』花神社，pp.142-152.
堀場清子，2009,『高群逸枝の生涯：年譜と著作』ドメス出版.
水田宗子，2012,『モダニズムと〈戦後女性詩〉の展開』思潮社.
山下悦子，2022,「小伝　高群逸枝」芹沢俊介・服藤早苗・山下悦子編『別冊環26 高群逸枝1894-1964』藤原書店，pp.10-53.
プラトン，1974,「テアイテトス」(田中美知太郎訳)『プラトン全集』２，岩波書店，pp.173-409.
ハラウェイ，D.，2017,「人新世、資本新世、植民新世、クトゥルー新世：類縁関係をつくる」(高橋さきの訳)『現代思想』45 (22), pp.99-109.
Clarke, Adele E., 2018, “Introducing Making Kin Not Population,” Clarke, Adele E., Haraway, Donna., eds., *Making Kin Not Population,* Chicago: Prickly Paradigm Press, pp.1-39.
「방탄소년단 RM『초심 잃어가는 걸 생계 탓하지 마라』.. 새벽에 올린 글귀」『스타뉴스』(2022.10.13)(https://www.starnewskorea.com/stview.php?no=2022101308335182110) 2023.8.13閲覧.